

アンティオキア教会から按手の祈りを受けて送り出されたバルナバとパウロは、キプロス島へと渡り、そこで地方総督に信仰を宣べ伝えた後、現在のトルコに渡り、ピシディア州のアンティオキアにあるユダヤ教の会堂でパウロが最初の説教を行いました。この説教については、先週の礼拝で学んだとおりです。そこでイエス・キリストを宣べ伝えたパウロの説教は、多くのユダヤ人や改宗したギリシア人たちに喜んで受け入れられましたが、ユダヤ教の古くからの伝統を重んじる人々からは、パウロの説教を妨害する行為が行われました。そこでパウロは次のように話します。使徒言行録13章46節、「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。主はわたしたちにこう命じておられるからです。『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、あなたが、地の果てにまでも、救いをもたらすために。』」

こうしてパウロとバルナバは、ピシディア州のアンティオキアから追い出されていきますが、次にイコニオンという町に出かけていきます。イコニオンは、ピシディア州のアンティオキアから130キロほど離れたところにある商業都市でした。そこで伝道活動を始めたバルナバとパウロでしたが、今日の聖書の箇所冒頭にもありますように、彼らはまたユダヤ教の会堂に入ってイエス・キリストの福音を宣べ伝え始めました。なぜでしょうか。初代教会の人たちにとってはまだ、キリスト教とユダヤ教の明確な区別はありませんでした。初代教会の人たちにとっては、自分たちの神は旧約聖書に出てくる天地創造の神であり、イスラエルの民をエジプトの奴隷から解放してくださった同じ神様だったのです。ただかつてのパウロ自身がそうだったように、ユダヤ教の人々にとっては、イエス・キリストを神と認めることができませんでした。それには、神の性質に関するとても大きなハードルがありました。これは、毎月行っている勉強会の中でも少しお話ししましたが、ユダヤ教の人々にとって、天地創造の神であり、イスラエルをエジプトの奴隷から導き出した神は、全知全能の神なのです。全知全能とは、今はやりのAIによると、全知はこの世のあらゆる事象を完全に把握していることを表し、全能はすべての物事を思い通りに実現する力を併せ持つことを意味します。世のすべてを知り、世のすべてを思い通りに動かすことのできるお方。この全知全能の神は、痛みや苦しみを知りません。痛むことや苦しむことのないお方。まして、死んだりすることもないお方。これが、旧約聖書が語る全知全能の神なのです。従って、ユダヤ教の人々にとっては、十字架上で痛み、苦しみ、死んでいかれたイエス様は、救い主キリストではなく、神でもないのです。

ところが、私たちキリスト教においては、イエス様に対して違う理解を持ちます。痛むことも苦しむこともない神、まして死ぬこともない神が、天から降ってこられて私たち人間と同じ肉体を持たれた。私たち人間と同じ痛みや苦しみを受け、人間と同じように死に引き渡された。だから、イエスはキリスト・救い主なのだ。キリスト教では、そのように理解するのです。キリスト賛歌として有名なフィリピの信徒への手紙2章6節以下では、そのことが次のように語られています。新約聖書363ページです。【キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、

死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。】

このイエス・キリストが神であるかどうかということは、ユダヤ教とキリスト教の論争だけにとどまらず、初代教会の中でキリスト教が形づくられていく中でも、大きな論争となっていくます。キリスト教が形成されていく中で、イエス様は神ではなく人であるという議論が巻き起こってくるのです。それに対抗するために出てきたのが、三位一体論です。これはまた勉強会の時にくわしくお話ししたいと思いますが、父なる神、子なるキリスト、聖霊なる神が、一人の神であるということを言い表したのが三位一体という言葉で、三位一体という言葉は聖書には出てきません。よく政治家が三位一体の改革みたいな使い方をしますが、あれは使い方が根本的に間違っていますので、あんな言い方を得意げに使っている政治家は、自分の無知さ加減を公に言い表していると思いながら見ていただけたらと思います。

話が横道にそれましたので、今日の聖書の箇所に戻りますと、イコニオンのユダヤ教の会堂に入ってイエス・キリストの福音を宣べ伝えたパウロとバルナバでしたが、その結果、1節の後半にありますように、大勢のユダヤ人やギリシア人が信仰に入っていきます。けれども、こんなふうには伝道が成功していくと、すぐにチャチャを入れる人たちが現れてきます。2節には、信じようとしないうダヤ人たちが、異邦人を扇動し、パウロとバルナバに対して悪意を抱かせたと記されています。ところが、3節にはこんなことが記されています。「それでも二人はそこに長くにとどまり、主を頼みとして勇敢に語った。主は彼らの手を通してしるしと不思議な業を行い、その恵みの言葉を証しされたのである」。パウロとバルナバは、主を信じないユダヤ人たちが異邦人を扇動して悪意を抱かせていたにもかかわらず、その地にとどまり続け、主を頼みとして勇敢に御言葉を語ったのです。そこで今日は、説教題に取り上げた「主を頼みとして勇敢に」ということを、ご一緒にもう少し考えてみたいと思います。

パウロが書いた手紙、フィリピの信徒への手紙の1章12節以下に、こんなことが記されています。新約聖書361ページです。【兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。】

この手紙を書いたとき、パウロは監禁されていました。パウロはここで、から元気を出しているのではありませんでした。パウロには確信がありました。自分が監獄に捕らえられているのは、法に背いたからではない。イエス・キリストの福音を語ったために監禁されているのだ。パウロは、自分が福音のために監禁されていることをフィリピの人々の告げ知らせたかったのです。

パウロはさまざまな試練に出会いました。その試練の中で、パウロの信仰も変えられていきました。「主がおられるところに苦しみはない」という御利益的な信仰から、「苦しみのあるところにこそ、常に主がおられるのだ」という信仰へと変えられていったのです。

ですからパウロには確信がありました。キリストの福音のゆえに牢獄に監禁されている自分と共に、主はいつもいてくださる。この確信を伝えること。それが、パウロが獄中から手紙を書いた原動力でもありました。

フィリピの信徒への手紙は、「喜びの書簡」とも称されています。いたるところに「喜び」という言葉が出てきます。1章3節以下にはこんなふうに記されています。【わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。】パウロのこの喜びは、フィリピの信徒たちだけのためのものではありませんでした。1章18節には、こんな言葉が記されています。【だが、それがなんであろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいます。これから喜びます。】ここに「喜ぶ」という言葉が二つ出てきます。最初の「喜び」は、これまでの出来事を喜んでいることを表しています。たとえどのような動機であれ、キリストの福音が告げ知らされていくことは、パウロにとってはこの上ない喜びなのだ。パウロが牢獄に捕らわれになっていることですら、自分がキリストの福音のためにいわれのない試練にあっていることを証しする良い機会となった。パウロはそのことをとても喜ぶのです。同時に彼は、これからも喜ぶのだと、未来に向けての喜びを表します。パウロが、将来に向けての喜びを語る時、それは牢獄から解放され自由になることを意味しているのではありませんでした。たとえ牢獄から解放されなくても、たとえこの身が自由になることはなくても、パウロは「これから喜ぶ」と告げるのです。パウロの喜びとは、牢獄から解放され自由の身になることではありませんでした。たとえ自由の身にならなかったとしても、やがて救いを受けることができる。そのことを喜ぶのだ。ここでパウロが語る「救い」とは、牢獄から自由の身になることではなく、神の救いを受けることです。たとえ体の自由は奪われても、魂の自由、魂の救いを奪うことはできない。パウロは、神の救いに与る確信をいただき、そのことが将来の喜びであると語るのです。神の救いを受けることができるなら、この世の命があるかないか、そんなことはどうでもよいのだ。ここでパウロは、自分の命をおろそかにしているのではありません。そうではなくパウロは、キリストの救いを受けることができるなら、牢獄に捕らわれの身であろうとも自由な身になろうとも、この世の命が与えられようとも奪われようとも、それらはもはや関係ないのだと、パウロは語るのです。ですからパウロは、自分自身が神様から与えられた恵みとして、フィリピの信徒たちにもその恵みを、1章29節でこう語るのです。【つまり、あなたがたには、キリストを信じることでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。】「キリストのために苦しむ恵み」。それは、苦行や荒行のように、自分を苦しめることによって得られる何かではありません。「キリストのために苦しむ恵み」とは、自分が囚われの身となったことによって、いっそうキリストの福音が宣べ伝えられていく恵みであり、口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされていることを喜ぶことなのです。

パウロはこのように、どのような状況の中に置かれていても、常に喜んでキリストの福音を宣べ伝えていました。そのようなパウロでしたから、今日の聖書の箇所に戻りますと、ユダヤ人たちが異邦人を扇動し、二人に対して悪意を抱かせていたにもかかわらず、パウロとバルナバはその地にとどまり続け、主を頼みとして勇敢に福音を語り続けたのです。

ルカによる福音書 8 章 26 節以下に、悪霊に取りつかれたゲラサ人を癒す出来事が記されています。イエス様から悪霊どもを追い出してもらったその人が、イエス様にお供したいとしきりに願いますが、その時イエス様はこう言われました。「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい」。その人はイエス様から言われたとおりに、自分の町中に救いの恵みを言い広めたのです。私たちも、伝道をしなければと願いながら、けれども自分が生きている生活圏では福音を宣べ伝えるのにとっても大きな困難を覚えます。「こんなことを語ったら、まわりの人たちからどんなふうに思われるだろうか」、「こんなことを語って、ここで生活できなくなったらいやだなあ」。そんなふうに感じたことはないでしょうか。けれども私たちもパウロのように、主を頼みとして勇敢にイエス・キリストの福音を語っていきたいと願います。なぜなら、私たち自身がこの福音にあずかって豊かな生活を送ることができているからです。この中に、教会にいやいや来ている人はいないでしょう。中にはそういう人もいるかもしれませんが、教会は強制されてくるものではありません。みなさん、教会に来たいから、こうして礼拝に集っておられるのではないのでしょうか。そのワクワクした思いを伝えていきたい。自分のまわりの人たちと一緒に、喜びの礼拝を献げたい。そんな思いを伝えていけたら、主を頼みとして勇敢に、伝えていけたらと思います。私たちもパウロのように、礼拝を喜びながら献げ、その喜びを一人でも多くの人に伝えていけたらと願います。

お祈りしましょう。